

日本とインドネシアの農山漁村での学び ～SUIJI サービスラーニングを振り返って～

■ 藤野 紀子 (SUIJI 推進室)

キーワード：サービスラーニング、サーバントリーダー、農山漁村、フィールドワーク、持続可能な社会

はじめに

高知大学は、愛媛大学、香川大学とインドネシア共和国のボゴール農業大学、ガジヤマダ大学、ハサヌディン大学との協働プログラムとして、「日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービスラーニングプログラム (Six-University Initiative Japan Indonesia Service Learning Program (以下、SUIJI-SLP))」を実施している。本プログラムは、日本とインドネシアの6大学の学部学生が、四国とインドネシアの農山漁村にそれぞれ約2週間滞在し、地域が直面している問題や課題を抽出し、それらの解決に貢献する活動に取り組むものである。

本稿は SUIJI-SLP の紹介とともに、筆者が平成27年度 (2015年度) と平成28年度 (2016年度) に担当した際の実践を報告する。

※本プログラムは、平成24年度から平成28年度までの5ヵ年、文部科学省「大学の世界展開力強化事業」の採択を受け実施 (主幹校：愛媛大学)。

1. SUIJI-SLP について

1-1. SUIJI-SLP の仕組み

【座学「地域未来創成入門」】

SUIJI-SLP に参加する学生はまず、一次産業を中心とした持続可能な社会に関する基礎を学ぶ「地域未来創成入門」(1単位)を履修する。この科目では、なぜ地域に学ぶことが必要なのかを軸に、人それぞれの価値観を尊重すること、日常生活における「発見・驚き」「違和感」「疑問点」などを意識的に探すこと、地域に眠っている資源を見つけることとその視点を持つこと、そして地域への入り方を身につける。

【国内サービスラーニング (国内 SL)】

「地域未来創成入門」を履修した学生は、8月中旬から9月上旬の約2週間、愛媛、香川、高知大学が提供する四国8ヶ所の活動サイトに分かれて活動する(4単位)。インドネシア側3大学からも合計40名の学生がこのプログラムに参加するために来日する。高知大学では、毎年14,5人のインドネシア人学生を特別聴講学生として受け入れている。また、インドネシア人学生については、JASSOの「海外留学支援制度(協定受入)」の奨学金を得て来日し、活動を行っている(代表校：愛媛大学)。日本学生とインドネシア学生総勢110名余りの学生が、8ヶ所の活動サイトに分かれ(1サイト、日・イ学生混合の14,5名のグループ)、地域の公共施設をお借りし、まさに「炊事(自炊)」しながら、寝食を共にし、地域にどっぷり浸かって、地域の方々との交流やヒアリングを重ねながら、地域のこと

を知る活動、地域の問題や課題を抽出する活動を行う。

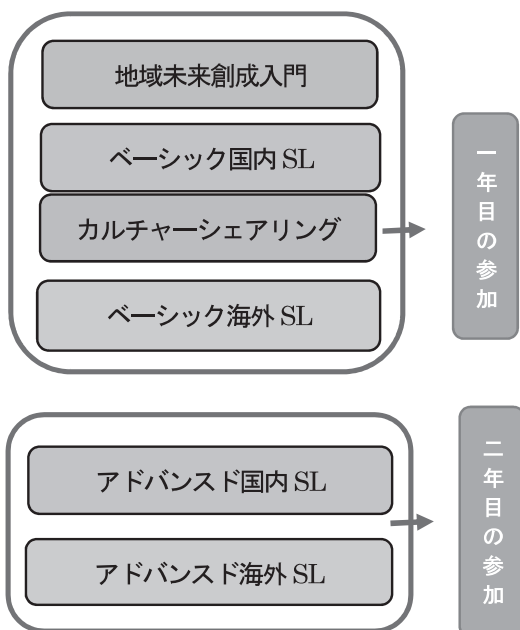
この国内 SL に併せて、日・伊両国の学生は互いの国の文化紹介をおこなったり、高知城や桂浜へ行き、高知の歴史について学んだりする「カルチャーシェアリング」（1 単位）も行っている。

【海外サービスマーケティング（海外 SL）】

当該年度の（後学期）2 月下旬から3 月中旬にかけての2 週間、今度は日本学生約60名がインドネシアへ行き、インドネシアの3 大学が提供する5ヶ所の活動サイトに分かれて活動する（1 サイト、日・伊学生、混合の20~25名のグループ）（4 単位）。日本学生は JASSO の「海外留学支援制度（協定派遣）」の奨学金を得てインドネシアへ渡航し、活動を行う（代表校：愛媛大学）。活動中はインドネシアの村の一般的な家庭にホームステイする。

SUIJI-SLP では、「地域未来創成入門」から始まり、1 回目の国内 SL、海外 SL を履修する学生のことを「ベーシック」と呼んでいる。そしてもう一度同じ場所で活動を行い、地域のことをより掘り下げてみたい学生は、2 年目に2 回目の国内 SL、海外 SL を履修することも可能である。この2 回目の課程に進む学生のことを「アドバンスド」と呼んでいる。アドバン

図1：カリキュラムの構成



スドの学生は、自身の関心のあることを掘り下げるだけでなく、ベーシックの時に参加した時と同じ活動サイトに入る（中には、ベーシックの時とは違う活動サイトに参加する学生もいる）、ベーシックの学生を引っ張るリーダー的存在としてグループをまとめる役割も担っている。

高知大学の「地域未来創成入門」「国内 SL」「海外 SL」（アドバンスド、ベーシック）の履修学生数については表1、高知大学が国内 SL で受け入れたインドネシア学生数については表2の通りである。

表1：SUIJI-SLP 関連科目履修学生数

科目名	学部名称	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	総計
地域未来創成入門	人文	1	0	4	0	5
	人文社会科学				1	1
	農	24	15	16	0	55
	農林海洋科学				15	15
	地域協働				1	1
	計	25	15	20	17	77
カルチャーシェアリング	人文	0	1	2	0	3
	農	8	19	10	1	38
	農林海洋科学				9	9
	計	8	20	12	10	50
ベーシック国内SL	人文	0	1	4	0	5
	農	8	19	20	2	49
	農林海洋科学				10	10
	計	8	20	24	12	64
アドバンスド国内SL	農		0	2	1	3
ベーシック海外SL	人文	1	0	0	0	1
	農	15	10	6	1	32
	農林海洋科学				3	3
	計	16	10	6	4	36
アドバンスド海外SL	農		3	3	3	9
総計		57	68	67	47	239

※交換留学生（特別聴講学生）は除く

※平成29年（2017年）1月10現在

表2：インドネシア人学生受け入れ数（特別聴講学生）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	総計
人数	6	12	14	14	46

1-2. SUIJI-SLP の特徴

SUIJI-SLP には、いくつかの特徴がある。(1)日本とインドネシアの農山漁村が活動と学びの現場であること、(2)参加学生は日本学生とインドネシア学生で、1つの活動サイトは、日・イ混合の学生でチーム編成されていること、(3)教員があらかじめテーマを与えるのではなく、学生自らが自分たちのチーム目標を決め、また個人目標を決めること、(4)高知大学全学部の学生が履修可能であり、主に1年、2年の共通教育科目(教養科目キャリア形成支援部門)として位置づけられていること、(5)1-1でも述べたように、1回目に参加する学生のことを「ベーシック」、より深く地域を学びたい学生は「アドバンスド」として履修し、活動できること、(6)サーバントリーダー(地域社会で献身的に活動するリーダー)の養成を目指していること、(7)学生の評価は、高知、愛媛、香川の3大学の教員が、各学生の「サイト内での活動」「最終成果発表」「レポート」について採点し、総合的に評価していること、などが挙げられる。

1-3. 活動サイト

【国内 SL】

学生の活動は、国内 SL では四国の8サイトで展開されている。高知大学は、室戸市佐喜浜地区、安田町中山地区、そして大月町柏島地区の3サイトを、愛媛大学は、西予市明浜地区と高川地区、宇和島市蔭沢地区、そして愛南町銭坪地区を、香川大学は小豆島町中山地区をそれぞれ活動サイトとして用意し、日・イ合わせて約110名の学生がこの8つのサイトに分かれて約2週間活動する。



図2：国内 SL の活動サイト

【海外 SLP】

海外 SL では、日・イ合わせて約120名の学生がインドネシアの5サイトに分かれて活動する。ボゴール農業大学はボゴールとトゥガルの2つのサイトを、ガジャマダ大学はバントウルとグヌン・キドウルの2つのサイトを、そしてハサヌディン大学はスプルモンデ・バラロンポ島をそれぞれ活動の場として用意している。



図3：海外 SL の活動サイト
<https://www.google.co.jp/maps/>

2. SUIJI-SLP での活動

2-1. 国内 SL

国内 SL は8月から9月にまたがる約2週間、実施される。高知3サイトの主なスケジュールは、以下の通りである。

- ・インドネシア学生来日、愛媛大学においてオリエンテーション参加
- ・1日目～3日目：高知大学物部キャンパスに集合。日・イ学生の顔合わせ。高知県の概要、高知3サイトの概要把握、情報共有。チームの目標設定と活動内容の吟味。買出し、各サイトへ移動。
- ・3日目～14日目：各サイトでの活動。
- ・14日目～16日目：各サイトから高知大学物部キャンパスに集合。カルチャーシェアリング実施。各サイトの活動内容・成果のまとめと発表準備。物部キャンパスにおいて各サイトの成果発表。大洲青少年交流の家(愛媛県大洲市)に移動。愛媛、香川サイトの参加学生と合流。

- ・16日目～19日目：最終発表会の準備。8サイト合同発表会。
振り返り。
- ・20日目：日本学生、各大学へ移動。インドネシア学生、帰国。プログラム終了。

インドネシア学生はもちろん、ほとんどの日本学生にとっても日本の農山漁村での活動は初めてである。何から手をつけていいのか（目をつけていいのか？）分からず、まさに手探りの状態で地域に飛び込む。学生たちは期間中、「Jalan-jalan（ジャラン・ジャラン＝散歩、散策）」というインドネシア語を使って、「Jalan-jalanに行こう！」と、とにかく地域の中をぐるぐる歩き回り、その地域に何があるのか、どんな人が、どのように暮しているのか、どんな時間の流れ方をしているのかを確認していく。学生は Jalan-jalan で見つけたもの全てを模造紙に落としこみ、可視化し、共有する。Jalan-jalan は、初めはただただひたすら「あるもの探し」からスタートし、「あるもの探し」の次は学生同士で「共有」を行っている。そして最後に地域の方々へのヒアリング・取材を通して「疑問を明らかにしていく作業」、「深めていく活動」へと進化していく。このような活動を積み重ねていく中で学生は、地域の方々との対話を通して日常の中から編み出された生活の知恵や工夫を知ることとなる。そして、しだいにこれまでの自分の日常にはなかった「驚き」と「感心・関心」、そして地域の方々（人生の先輩）に対する「敬意」へと気持ちが変わっていく。

一方、学生を受け入れてくださっている地域の方々には、地域を「教育の場」として提供して下さっている。プログラム開始当初は、地域の方にとって、このプログラムはなかなか理解しづらかったようだ。事前打ち合わせに何うと、地域の方から「学生がここへ来て、何が学べるやろか」という声が聞こえる。また、「え？地域の課題を抽出し、それを解決するためのアクションを起こす？3週間ばあ（3週間ほど）の短期間で、それは無理というものよ」という方もいた。インドネシア学生を受け入れるにあたって、「せっかく

外国から学生が来るので、おもてなしをして歓迎しよう」と準備をしてくださる方もいた。どの地域も本当に温かく、そして時には厳しく学生に接してくださる。

どのサイトも国内 SL 期間中、地域からどんなことを学んだのかを発表する成果発表会を行うのだが、学生たちは格好をつけず、素直に自分たちの気づきや学びを発表する。学生の発表で、地域の方々のご自分たちが気づかなかった地域の良さや地域の方々にとっては当たり前のもの・ことが、外部の人間にとっては珍しいものだという事を知る。

ただ、プログラムの年数を重ねると問題点や課題も出てくる。このプログラムをより良いものにしていくために私たち引率教員は各地域を訪問し、地域の方からご意見をいただき、プログラムを再考している。「毎年、参加する学生が変わるので、一からプログラムを作り上げるため、毎回、地域住民と仲良くなるための交流に終始している感がある」「夏の一時期だけでは、本当に地域の課題や解決するアクションにはつながらない」「地域の中で暮らすということはどういうことなのか。人と人との関係性、価値観の多様性などについて積極的に学んでいってほしい」といった声をお寄せいただく。学生には自分たちがどういう立場で、何を求めて地域に入っていくのかをしっかりと認識するよう促していく必要があると感じている。

国内 SL の活動を終えた学生から、次のような「つぶやき」が聞かれた。

- 「これまで自分は、何か物が壊れた時に『修理しよう』などと思わず、新しいものを『買えばいい』と思ってきた。物を無駄遣いしない、ということはもちろん、『自分の手で何でもできる』ということを手につけたい」
- 「地域の人と『そうめん流しをやろう』となった時、本物の竹を使った。竹と竹のつなぎ目や傾斜、それらの角度が悪かった時に、サッと直せられる経験が、ごく当たり前に、普通に“ここ”にはある」
- 「地域のお母さんたちとお饅頭を手作りで作ったが、地域の人は粉と水の分量はだいたいの目安で、身体が

覚えている。その日の湿度や気温、手の温もり（体温）で微妙な調整をしている。

●昔は集落ごとでお祝い事や神祭を行っていたそう
だ。そういう時に集落の女性は集会所に集まって地域
みんなの料理を作っていた。お嫁にいった先のお義母
さんに味を教わるのはもちろんだが、昔はそういった
地域・集落の集まりの時に料理をすることによって、
地域の味を教わり、地域が、コミュニティが受け継が
れてきたのだ。

筆者が引率したサイトのある学生は、活動終了後の
報告書に「持続可能性」について次のようにまとめて
いた。

「『持続可能とは何だろう』という疑問の答えを考え
ながら活動した。『持続可能』とは『受け入れる』とい
うことではないだろうか。『受け入れる』ということ
は、ある文化や伝統を守り受け継いでいくためのプロ
セスだと考える。考え方や感じ方は人それぞれで、個
人が自分の思いを持って生活する中で、互いに思いや
りの気持ちで相手を尊重し合い、共生していくこと、
寛大な心で臨機応変に対応していくことである。その
ためには、『人と人との共生』『自然と人との共生』『過
去と現在と未来の世代との共生』が必要であると考え
る。」



写真1 Jalan-jalan



写真2 地域の「ある物探し」をした後、各自で見つけたものを共有



写真3 地域の方に教わりながら、流しそうめんの準備



写真4 田舎寿司を地域の方々と一緒に調理



写真5 テングサを干す作業



写真6 お世話になった地域の方々へ、自分たちの学びを報告

2-2. 海外SL

国内SLに参加した学生は、その年度の2月から3月にかけて約2週間、インドネシア5ヶ所のサイトに分かれて活動する（一部、海外SLからスタートする学生もいる）。主なスケジュールは以下の通り。

- ・1日目：高知からインドネシア・ジャカルタへ移動。
ガジャマダ大学が提供する2サイト、ハサスディン大学が提供するサイトに参加する学生は、ジャカルタからジョグジャカルタ、マカッサルへそれぞれ移動。
- ・2日目：各大学でオリエンテーションを実施。インドネシアについての概要、サイトの説明など。チームの目標設定と活動内容の吟味。買出しなど。
- ・3日目～14日目：各サイトへ移動。サイトでの活動。

- ・15日目：各サイトから大学の宿舎へ移動。各サイトの活動内容・成果のまとめと発表準備。
- ・16日目：各大学で各サイトの発表。カルチャーシェアリング実施。
- ・17日目：ジョグジャカルタ、マカッサルからボゴール農業大学へ移動。全参加学生が合流。最終発表会の準備。
- ・18日目：5サイト合同発表会。
- ・19日目：振り返り。日本学生、インドネシア出発。
- ・20日目：日本学生、日本に帰国。プログラム終了。

（余談になるが）インドネシアの大学では、地域開発のための人材育成プログラムである「学生の農村実習/実践教育（Kurilah Kerja Nyata（KKN）」というのが40年以上も前から行われているようだ。KKNを通じた地域づくりにおける学生の役割は、①社会の変化を促す、②多彩な能力を発揮する、③弱点はあったとしても、社会に新たな視点を提供し、エンジンとなり、社会の問題解決をはかる、と聞いている。（2013年8月28日～30日開催のSUIJIセミナー、ガジャマダ大学の発表より）。そのため、インドネシア学生は、地域で活動するための準備や段取りにそつがなく、目的・目標を明確にして活動している。日本学生は渡航前からインドネシア学生とLINEやFacebookなどのSNSを活用して、自分たちがインドネシアの農山漁村で見てみたいこと、会ってみたい人、取り組んでみたいことなどを伝えている。そのリクエストに応えるべく、インドネシア学生は事前準備をしてくれている。

海外SLでもまずフィールドワークの基本、Jalan-jalanを行って、地域の「ある物探し」を行う。見るもの、聞くもの、食べるもの。日本人学生にとっては全てが異文化であり、五感が刺激される。

学生たちは、それぞれ自分の関心を持ったものに着目し、そのことを掘り下げる活動と、チームとして1つのテーマを定め、それについて掘り下げる活動を行う。ある学生はホームステイ先のお母さんが作る家庭料理がものすごく美味しいので、テーマを「食」に決めて、お母さんと一緒に朝5:00に市場に買い物に行

くところから調味料の合わせ方、鳥肉のさばき方、調理方法までを取材していた。別の学生は、「農業」・「経済」・「環境」・「文化」などがコミュニティの中で、小さなサイクルで成り立っていることに気づいた。これらの「循環」がどのような仕組みになっているのかを納得がいくまで観察・取材をし、村人から「なぜ、農作業を機械化しないのか」という理由を引き出した。またある学生は、自分が何か地域のために役に立ちたいと思い、意気込んで地域に入ったのはいいが、インドネシア人の農家の方に「君たちはいくつ（何歳）だ？自分たちはずっとこの土地で農業をやっているんだ。君たちよりずっと経験があるんだよ。」と言われ、へこんでしまったという、ある意味いい経験をした学生もいる。貴重な失敗経験と言えるだろう。

2016年2月に行った海外SLで筆者が引率したグループは、「ゴミ問題」を取り上げた。プログラムの最後に行われる5サイト合同発表会の時に分かったことだが、この「ゴミ問題」は、海外SLの全グループが取り上げたテーマだった。日本からインドネシアに行った学生にとっては、道端に捨てられているたくさんのゴミが目に入るためだろう。ペットボトルやお菓子や飴玉の包みなど、石油由来のゴミが散乱していた。学生は、どうすればゴミのポイ捨てが無くなるのかを考えた。「まずは自分たちが行動しよう」「小学校へ出張授業（出前講座）しようか」「村長に頼んで、ゴミ箱を置かせてもらおう」。色々なアイデアが出た。

筆者は学生に「私たちがこの村からいなくなっても、地域の人たちで継続してもらえるようにしよう」とだけ伝えた。もちろん学生も、これまで長い間、当たり前とされていた習慣が簡単に変化するとは思っていなかった。

学生たちは地元の小学校へ行き、校長先生に出張授業（出前講座）の実施を依頼、まずは教室で子どもたちにゴミをポイ捨てしてはいけない理由を伝え、一緒にゴミ拾いをし、校内にゴミ箱の設置も認めてもらった。また、村長にはゴミ箱を設置することを提案・依頼をし、置かせてもらった。「日本人」である自分たちがすることは、インドネシアの人たちに対して、イン

パクトを与えるのではないか。学生は子どもたち中で1人でも2人でも環境のことを意識して行動してくれるといいという一心でこの活動を行った。



写真7 グループミーティングの様子



写真8 村長さんの奥さんへのヒアリング調査。インドネシア語、英語でのやり取り

2-3. SUIJI-SLPの活動から得られる気づき

学生はSLの活動を通して「行動することの大事さと価値」に気づく。2-2で述べたゴミ問題は、インドネシアのサイトだけではなく、国内SLでも取り組んだチームがあった。8月～9月に実施される国内SL。とても美しい海で有名な場所が、パッと見では見えないところにビールやジュースの空き缶や空きペットボトル、プラスチックのお弁当の空き箱、BBQセットや日よけのパラソルなどが捨てられていて、学生たちは海岸清掃を行うことを決めた。学生たちが掃除をしていると、始めは楽しそうに海で遊んでいた海水浴客の

中に、学生の活動の様子をじっと見ていた人がいたり、自ら空き缶を拾いゴミ袋に入れてくれた人、清掃活動後、何十袋にもなったゴミ袋を学生が運んでいると手を貸してくださったりした人がいた。学生はこれまで特にボランティア活動などで『自分から行動しよう!』と言われてたり聞いたりしてきたけれど、『自分たちが行動することによって、他者の意識や行動をも変えることができる』ということを現実のこととして経験することができた。また、自分たちの行動は小さなことかもしれないが、それに気づいてくれる人がいる、継続していけば世の中はいい方向に変化していくのではないか、そういう可能性があるということを経験を通して自分の言葉で伝えられるという手ごたえを感じることができた活動だった。

SUIJI-SLP は、「農山漁村の現状を把握し、課題や問題を抽出し、解決する」という大きな目標はあるが、国内 SL でも海外 SL でも、学生は「まずは地域の現状を把握する。でも、把握するのは簡単ではない。そして知ったかぶりや、『もう自分は十分に分かった』などと驕ってはいけない。地域に暮らす人々を敬い、『教えてください』という謙虚な姿勢が大事である。」という基礎基本を、身をもって経験する。そして学生たちは（筆者も改めて）どんな環境の変化にあおうとも、その土地に暮らす人は芯があり、本当に強いのだと気づかされるのである。

アドバンスドの学生として2回目に参加する学生の中には、SUIJI-SLP の活動後、高知県内のある中山間地域、限界集落を活動拠点に、地域の方に休耕田を借りて農作物を栽培、更には加工、販売まで挑戦する学生がいたり、国内 SL でお世話になった地域に足しげく通い、丹念にその地域の郷土料理や地域の食材・農作物についての取材を行ったりする学生がいる。

他方、海外に関心をもつ学生もいる。かねてから東南アジアに興味のある学生や海外 SL をきっかけにインドネシアに関心をもった学生は、自分の専門分野を切り口に、インドネシアでのフィールドワーク、調査・研究を実現するために留学にチャレンジする学生もいる。

国内 SL、海外 SL に参加することにより、普段の大学生活とは違う「非日常」を経験することは、価値観の幅や多様性が広がり、SL 参加後の大学生活や（大げさかもしれないが）人生にも影響を与えるほどの経験であるように思われる。

3. SUIJI-SLP、フィールドワークを行う意義と課題～高知大学「国際交流ポリシー」「国際戦略」の視点を交えて～

国内 SL、海外 SL に参加すると非日常を経験するので、学生は端的に「参加してよかった」という感想をもつ。経験を積むことで自信につながり、視野も広がって、人生観が変わったという学生もいる。しかし、「体験を学びとする」ことが必要であり、言い方を代えれば「体験の言語化」が必要だろう。「参加したことがどう良かったのか」「何を得たのか」「どんな力がついたのか」「経験したことを今後、どのように活かせるのか（と思っているのか）」を言葉に代え、伝える力をつけなければならない。ここが観光旅行とは違う点であり、フィールドワークを教育プログラムとして行う上で大事なことであり、教育成果をはかる上で今後の課題であると思料される。

また、グローバル人材/グローバル人材・地球市民の育成という上でも海外経験はますます不可欠なこととなるだろう。国内 SL、海外 SL で日本学生とインドネシア学生がある一定期間、寝食を共にして活動することによって、毎日毎日何かしらの文化や習慣の相違に気づいたり感じたりすることはもちろん、逆に共通点を見出して心の距離がグッと縮まるのを感じたりできる。学生の中には「英語」に対して苦手意識を持っている学生もいるが、その「英語」という共通言語を駆使し、毎日グループワークで情報共有を行ったり、各学生の学びを共有し、それらを集約してグループとしての活動の成果をまとめていったりする。自分の意見や思いを伝えるために、羞恥心を捨て果敢に英語でコミュニケーションをとろうとする。国は違えども、農学なら農学、教育学なら教育学、国際交流なら国際交流、スポーツならスポーツで、日・イの学生がお互い

の専門や興味・関心の共通項を見つけ、語り、意見交換をし、だんだんと仲間にまみれ、互いの違いを認め、価値観の違いを認め、多様性を受け入れるようになっていく。

「高知大学国際交流ポリシー」の1つに「ローカルな体制からグローバルな体制へ」がある。SUIJI プログラムは、冒頭述べた通り、四国の3つの大学とインドネシアの3つの大学の協働プログラムである。引き続き愛媛、香川、高知が連携しながらプログラムを企画・実施するとともに、この5年間の実績と経験を生かすべく、6大学間の協力関係を維持しながら、「量とともに質の充実」を図っていかなければならない。そしてSUIJI プログラムは「地域」「農山漁村」というローカルを活動の場とし、日本学生とインドネシア学生が英語を共通言語としてコミュニケーションをとり、「田舎」と「海外・世界」のつながりを知るプログラムである。今後もローカルとグローバルの両面で実施するとともに、SUIJI プログラムを通して、海外に関心を持った学生のフォローアップが必要となるだろう。

また「受入中心から相互交流へ」も掲げているポリシーの1つであるが、SUIJI プログラムは「受入だけ」でも「派遣だけ」でもない、「双方向」のプログラムである。いきなりの留学は無理でも、例え2週間でもインドネシアでの活動を経験することで、日・伊互いの国への関心が高くなり、また、自分の国のことも考えるきっかけとなるだろう。

さらに「高知大学国際戦略」の1つには、「グローバルな人材育成を目指し、双方向の国際交流を促進する」とあるが、このSUIJI プログラムはまさにこの戦略に合致したプログラムである。SUIJI プログラムは、学生がそれぞれの専門分野の視点で日本とインドネシアの農山漁村での活動を通じて「サーバントリーダー」として成長することも目的の1つとしている。日・伊の学生が協働で活動・生活を行う異文化交流を通じて、互いの価値観の違いや擦り合わせの必要性や重要性を知ることができる。

訪れた国の文化や宗教、歴史を知り、尊重できる人

間、自分と同世代の大学生がどんな考えを持っているのかにも興味をもち、対話のできる人材へと成長してほしいと思う。学生にはこういった大学のプログラムを大いに活用し、学生時代にぜひ海外での経験を積んでほしいし、内なる国際化に順応に対応できる人材となってほしいと思う。

【参考文献】（履修学生に紹介したものを含む）

- 宮本常一、安溪遊地『調査されるという迷惑 - フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版、2008年。
- 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書、2008年。
- 小田切徳美『農山村再生「限界集落」問題を越えて』岩波書店、2009年。
- 玉沖仁美『地域をプロデュースする仕事』英治出版、2012年。
- 藻谷浩介『里山資本主義』角川新書、2013年。
- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価入門』2014年。
- 源由理子『参加型評価 - 改善と変革のための評価の実践』晃洋書房、2016年。
- 高知県産業振興推進部計画推進課『第3期 高知県産業振興計画』、2016年。